保育者養成のための領域「表現」における連携授業
―造形から音楽への段階的カリキュラム―

Cooperation class in domain "expression" for the childminder training
- Graded curricula from molding to music -

安　井　良　尚　・　杉　山　真　規　・　岩　城　正　幸
Yoshihisa YASUI, Maki SUGIYAMA & Masayuki IWAKI

要旨

本稿では、養成校である奈良保育学院令和３年度１年生45名に対して行われた「造形」と「音楽」の連携授業について取り上げ、領域を横断して行う授業の有効性について考察する。

今回は、造形表現として楽器と音具を製作した後に、それらを使って音楽表現として合奏を行うという段階的に進めていくカリキュラムのもとで授業を行った。連携授業の最終日に全員で行った合奏では、音楽表現に身体表現も加わり、学生たちが自ら表現者となって楽しむ姿が見られ、領域「表現」における今後の連携授業の重要性を認識する事ができた。授業後の学生たちへのアンケート結果からは、自作のオカリナを通して「音」について再認識した様子も見られ、手作りの楽器や音具を合奏に使った事で表現の幅を広げる事ができたといえる。また、令和４年に改訂された本学院のシラバスにおいても連携授業を導入していく事が可能であることも確認できた。

キーワード：幼児教育　カリキュラム　領域「表現」　連携授業

はじめに

平成29年３月31日に「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定子ども園教育・保育要領」が改訂された。基本方針では主に、幼稚園教育において育みたい資質・能力として「知識及び技能の基礎」、「思考力、判断力、表現力の基礎」、「学びに向かう力、人間性等」の３つを示し、「これらは個別に取り出して身に付けさせるものではなく、遊びを通しての総合的な指導を行う中で、一体的に育んでいくことが重要である」としている。また、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として10項目を挙げ、小学校教育への円滑な接続を図るように努めることを示した。領域「表現」のねらいと内容については、ほぼ変わらず、内容の取り扱いには「風の音や雨の音、身近にある草や花の形や色など自然の中にある音、形、色などに気付くようにすること」・「様々な素材や表現の仕方に親しむこと」が追記された。

教育課程に基づいて教育活動の質を向上させるためのカリキュラム・マネジメントについては、文部科学省のホームページ[1)] において、「幼稚園等ではカリキュラム・マネジメントが極めて重要」であると示されている。「幼稚園教育要領」では「教育課程に基づき組織的かつ計画的に各幼稚園の教育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努め

るものとする」[2] とされ、「幼保連携型認定子ども園教育･保育要領」では「全体的な計画に基づき、組織的かつ計画的に各幼保連携型認定こども園の教育及び保育活動の質の向上を図っていくこと（以下「カリキュラム・マネジメント」という。）に努めるものとする」[3] と明記された。「保育所保育指針」においては「各保育所の保育の方針や目標に基づき、子どもたちの発達課程を踏まえて、保育の内容が組織的･計画的に構成され、保育所の生活の全体を通して、総合的に展開されるよう、全体的な計画を作成しなければならない」[4] と記されている。保育所保育指針ではカリキュラム・マネジメントの言葉は使われてはいないが、保育者は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえた上で、組織的かつ計画的にカリキュラムの編成、実践、評価、改善を繰り返すことが求められている。

今回の改訂に基づいて養成校である奈良保育学院でも令和３年から４年に向けてカリキュラムの変更（表１、２）が行われた。表現の「造形」と「音楽」の授業は改訂後もそれぞれ専門の教員が個別に計画を立てて授業を行うことになっているが、養成校のカリキュラムにおいては今後領域を横断する視点や領域の教員が連携してチームで行う授業が必要になってくると考え今回の連携授業を計画した。また、今後のカリキュラムに導入することも可能であるか考察する。

令和２・３年度入学生に適用（表１）

<table>
<tr><td colspan="6">保育士資格</td></tr>
<tr><td colspan="3">必修科目</td><td colspan="3">選択必修科目</td></tr>
<tr><td>系列</td><td>教科目</td><td>開設科目名</td><td>系列</td><td>教科目</td><td>開設科目名</td></tr>
<tr><td rowspan="2">保育の内容・
方法に関する科目</td><td>保育内容演習</td><td>表現Ⅲ造形
（保育内容）</td><td colspan="2" rowspan="2">保育の内容・方法に関する科目</td><td rowspan="2">絵画製作
図画工作Ⅱ
器楽Ⅱ
器楽Ⅲ
器楽Ⅳ
音楽Ⅱ
表現Ⅰ音楽
（保育内容）</td></tr>
<tr><td>保育内容の
理解と方法</td><td>音楽Ⅰ
器楽Ⅰ
図画工作Ⅰ</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td colspan="4">幼稚園教諭２種免許状</td></tr>
<tr><td colspan="2">科目区分</td><td>授業科目</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="2">領域に関する専門的事項</td><td>音楽</td><td>音楽Ⅰ
音楽Ⅱ
器楽Ⅰ
器楽Ⅱ
器楽Ⅲ
器楽Ⅳ</td><td>必修
選択
必修
選択
選択
選択</td></tr>
<tr><td>図画工作</td><td>図画工作Ⅰ
図画工作Ⅱ
絵画製作</td><td>必修
選択
選択</td></tr>
<tr><td>領域及び保育内容の
指導法に関する科目</td><td>保育内容の指導法</td><td>表現Ⅰ音楽
表現Ⅲ造形</td><td>選択
必修</td></tr>
</table>

令和４年度入学生から適用（表２）

<table>
<tr><td colspan="5">保育士資格</td></tr>
<tr><td colspan="3">必修科目</td><td colspan="2">選択科目</td></tr>
<tr><td>系列</td><td colspan="2">教科目</td><td>系列・教科目</td><td>開設科目名</td></tr>
<tr><td rowspan="2">保育の内容・
方法に関する科目</td><td>保育内容
演習</td><td>表現Ⅲ造形
（保育内容の指導法）</td><td rowspan="2">保育の内容・
方法に関する科目</td><td rowspan="2">絵画製作
子どもと器楽Ⅱ
子どもと器楽Ⅲ
子どもと器楽Ⅳ
子どもと音楽表現Ⅱ
子どもと造形表現Ⅱ
表現Ⅰ音楽
（保育内容）</td></tr>
<tr><td>保育内容の
理解と方法</td><td>子どもと音楽表現Ⅰ
子どもと器楽Ⅰ
子どもと造形表現Ⅰ</td></tr>
<tr><td colspan="5">幼稚園教諭２種免許状</td></tr>
<tr><td colspan="2">科目区分</td><td colspan="2">授業科目</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">領域に関する専門的事項</td><td colspan="2">表現</td><td>子どもと音楽表現Ⅰ
子どもと音楽表現Ⅱ
子どもと造形表現Ⅰ
子どもと造形表現Ⅱ</td><td>必修
選択
必修
選択</td></tr>
<tr><td colspan="2">領域及び保育内容の
指導法に関する科目</td><td colspan="2">保育内容の指導法</td><td>表現Ⅰ音楽
（保育内容）
表現Ⅲ造形
（保育内容の指導法）</td><td>選択

必修</td></tr>
</table>

１、実践方法

養成校においては造形と音楽の様々な連携授業が試みられている。山野てるひ、岡林典子、ガハプカ奈美は、京都女子大学発達教育学部の保育内容指導法（表現）の授業において、音と体の動きを体験したのちに擬態語や自然の音を色や形で表現する音楽と造形の連携授業を試みており[5)]、難波純子、中山里美は富山短期大学のWebsiteで「子どもと音楽表現」と「子どもと造形表現」のコラボレーション授業を取り上げている。この授業で学生たちは、最初に音楽表現で幼児期にふさわしい楽器について考察した後に造形の授業で音具やオブジェ制作に取り組み、オリジナル曲での発表会を行なっている。さらに自分たちで作った曲を色や形で表現した「図形楽譜」も制作しており、造形と音楽を段階的に複数回往復するような連携授業が行われている。[6)] 中山は「身体表現、音楽表現、造形表現、言語表現を担当する教員がお互いの教育内容や方法を情報交換し、授業の目標を確認しながら系統的に学習計画を立てることが大切である」[7)] と述べている。

奈良保育学院では以前より、造形の授業で粘土の素焼きによるオカリナ製作を行い、その後、音楽教員の指導のもとでオカリナによる合奏の授業を行ってきた。[8)] 今回の連携授業でも、まず初めに「造形」の授業で楽器と音具を製作し、次に「音楽」の授業で音楽表現活動とアンサンブル遊びを行うという段階的なカリキュラムが学生にとっても目標や工程を理解しやすく、子どもたちへの指導計画を立てる場合でも有効であると考えて実践した。

本学院で令和３年度の１年生49名に行った造形担当講師安井の授業において、奈良保育学院の元講師である陶芸家の岩城正幸氏を特別講師として迎え、粘土を成形してオカリナ製作を行なった。

学生の夏休み中に焼成を岩城氏が行い、休み明けの９月に授業で彩色をして完成させた。さらに、安井の指導のもとで紙筒に風船を張って作った太鼓と、ストローの笛の「音具」も製作した。これらを使用して学院のホールで１年生45名は音楽担当講師杉山の授業において、杉山がアレンジして演奏する音楽に合わせて、各自が即興的にオカリナや音具でリズムを表現したり身体表現する等、音楽表現活動を行った。

２、楽器、音具製作

手作り楽器の製作のために今回は信楽産陶芸用粘土を使用し、石膏型によるオカリナ（ソプラノ管又はアルト管）と自由成形による土笛の２種類を製作した。焼成後は絵の具やポスカで着色しニスを塗って仕上げを行った。

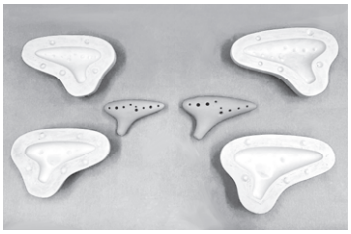
＜オカリナについて＞

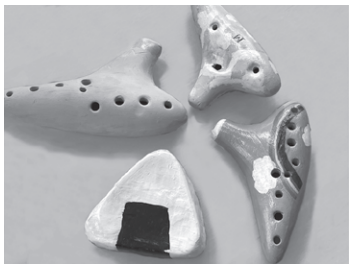
オカリナの起源はマヤ文明にあると言われている。16世紀にアステカの楽器がヨーロッパに伝わり、1860年頃にイタリアのジュセッペ・ドナティ（1836年～ 1925年）の手で改良されてほぼ現在の形となった。[9)]

＜粘土について＞

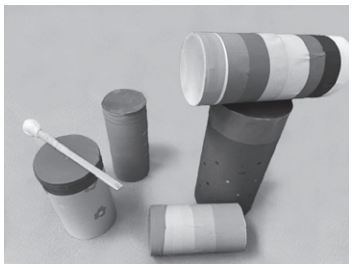
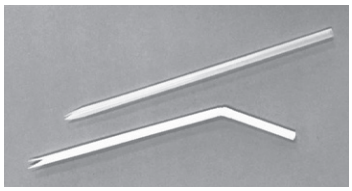
粘土はさまざまな種類があり、用途に合わせて使い分けることができる。子どもの粘土遊びは視覚とともに触覚を刺激し、感覚機能を発達させることに有効である。また、年齢の発達に応じた遊びが考えられ、他の素材との組み合わせや乾燥後の彩色なども可能である。

・オカリナと音具の製作

６月25日	①信楽産の粘土を使い石膏型による成形を行う
	１、岩城による菊ねりの実演を行い、粘土を学生に各自１kgとりわける。（菊ねりは粘土内の空気を押し出し、焼成時の破裂を防ぐために行う。） ２、粘土を板状に伸ばし、石膏型の大きさにカットする。 ３、型に粘土を押し付けはみ出す部分をカットする。 ４、接合部分に傷をつけ、粘土を水で溶いたどべを塗り接着する。 ５、型から外し、継ぎ目の粘土がはみ出た部分を削って成形する。 ６、後日作業の続きをする場合はビニール袋に入れて保管する。  写真１　オカリナの石膏型と成形されたオカリナ 左・ソプラノ管　右・アルト管
７月２日	②成形できた本体に竹ベラやストローを使って空気の通り道を作っていく
	１、歌口（エッジ）の部分をストローで穴を開け竹ベラで整える。 ２、吹き口から竹ベラを刺していき歌口に向けてウィンドウェイを作っていく。 ３、音階に合わせた大きさのストローで穴を開けていく。 ４、乾燥。

７月９日	③自由成形による笛の製作
	１、粘土で立体を製作した後、半分に切断して内部をくり抜いて空洞部分を作る。 ２、歌口（エッジ）の部分をストローで穴を開け竹ベラで整える。 ３、吹き口から竹ベラを刺していき歌口に向けてウィンドウェイを作る。 ４、切断部分にどべを塗って接着する。 ５、音階のことは考えずにストローで自由に穴を開けていく。 ６、乾燥。
	④素焼き
	焼成時の温度によって音色が変化する。 （1230度などの高温度の焼成では金属的な澄んだ音となるが、今回は素朴な柔らかい音を求めるために800度での焼成を行う。）
９月３日	⑤素焼きのオカリナと土笛に彩色をする
	１、素焼きのオカリナに絵の具やポスカで彩色をする。 ２、ニスを全体に塗って完成。  写真２　彩色されたオカリナと土笛

オカリナの彩色が終わった学生から、直径10cmの紙管に風船を張った太鼓とストローで作る笛を製作した。太鼓は、紙管の長さや風船の貼り具合によって音が変わる。ストロー笛は太さや長さによって音が変わるが、吹き込む息の強さで音の強弱を調整できる。

９月３日	①紙管の太鼓を製作する
	１、直径10cmの紙菅を長さ20 ～ 30cmにノコギリでカットする。 ２、切り口に風船を伸ばして張りカラーガムテープで止める。 ３、紙管部分に彩色をしたりマスキングテープなどで装飾をしたりする。  写真３　紙管の太鼓とバチ
	②ストロー笛を製作する
	１、プラスチックストローの先端を山形にハサミでカットする。 ２、切った部分を平たく押し潰してリードにする。  写真４　プラスチックストローの笛

３、音楽表現活動とアンサンブル遊び

学生にはオカリナ試奏前に音色のイメージを尋ねた。その後、試奏、基本奏法を練習した。令和３年度造形で製作したオカリナは、削る等の施しは加えておらず、音階調整は目的としていないオカリナと音具を使って、学院のホールでは、童謡やアニメソングを用いた杉山の伴奏に合わせて、音楽表現、身体表現を伴う活動、音具によるアンサンブル遊びを行った。

＜乳幼児の音楽遊びについて＞

乳幼児期の音楽表現活動は、子どもが自身の身の回りに興味や関心を持ったり、楽しく笑い合いながら全身を使う音楽表現遊び、五感（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚）で感じ取ったことを、リズムに乗って身体で表現しようとする音楽的なコミュニケーションから始まる。乳幼児期に行う音楽遊びは子どもにとって、穏やかで、やさしく、心のあたたかさを感じ取れることが重要である。子どもに喜びを与え、積極性や創造性を育むことで音楽への興味や音楽的感受性と音楽的積極性をさらに高めることができる。

保育者や仲間と音楽を楽しむ喜びを共有し終えた時に得た子どもの達成感や満足感は、子どもの更なる発達や活動のエネルギーへ繋げていけるよう、保育者が子どもの音楽遊びを援助する時には、遊びを通して学習していくという認識を持ち、子どもの感動体験を積み重ねられるように音楽活動を援助することが大切である。また、音楽的なコミュニケーション力「歌う」「踊る」「演奏する」を保育者自らも楽しめることが極めて重要である。

＜オカリナの各名称、運指配置について＞

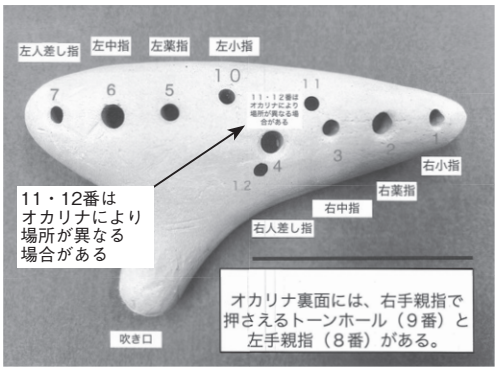


写真５　オカリナの表面

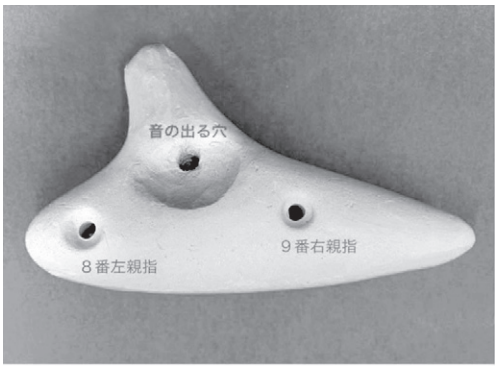


写真６　オカリナの裏面

＜音楽表現活動“導入”＞

・学生が想像するオカリナの音とは

オカリナを吹く前に音色のイメージを答えてもらった。この時点では、「優しい音のイメージ」「落ち着く音」「温かいような音」等の回答が多かった。その後一度軽く吹いてみて実際に自身が感じたオカリナの音色をオノマトペなどの言葉で表現してもらった。「ぷおーん」「透き通った美しい音色」「小鳥の囀り」「ヒュルリラ」「ポポポ」等、言葉の表現の豊かさが感じられるようになった。

続けて学生には音の出し方や音階等の扱い方は伝えずに、どのように吹いたらオカリナの鳴りが良くなるか探ってみるよう、５分程度自由にオカリナを吹いてもらった。ここでは、オカリナをただ吹いているだけではなく、音階を探ったり、となりの学生と音色を比べたり、吹く息の強さと音の関係を探っている学生の様子がみられた。

・製作したオカリナで音階を吹いてみる

オカリナの資料・図１運指表（３種類記載のもの：ソプラノＧ調、ソプラノＦ調、アルトＣ調）・アレンジした５曲のオカリナ譜を学生に配布した。

オカリナの構え方・吹き方は、全員アルト管Ｃ調設定。簡単な音階「ド・レ・ミ・ファ・ソ」の指使いを練習した。（図１参照）

各自オカリナで試奏してもらうと音程が正確に取れない学生もいたが、合奏では３種類の音階のうち一番近い音階の運指表で吹くように指導した。

更に、学生が製作したオカリナの試奏を観察していると、音程の狂いが全くなく美しい音程で音階が鳴らせる学生もいたが、一部だけ音程がずれている音階で鳴ったり、運指どおり吹くと（図１）異なる音から始まる音階で鳴ったりする学生もいた。中にはどこを押さえても同じ音しか鳴らなかったり、かすれた音しか鳴らなかった学生もおり、楽器としてのオカリナの仕上がり具合は様々であった。また、製作したオカリナで、どのように穴を押さえたら綺麗な音色で吹けるか何度も試したり、音階が上手く鳴らなくても穴の押さえ方や吹き方を工夫してなんとか正確な音階で吹こうと試みている学生もいた。今後の研究課題として、音楽担当の目線では、更なる表現の豊かさかを育むためには、造形でオカリナを製作する過程で、音階は奏でられる状態に近づくように何らかの配慮が必要であると考える。

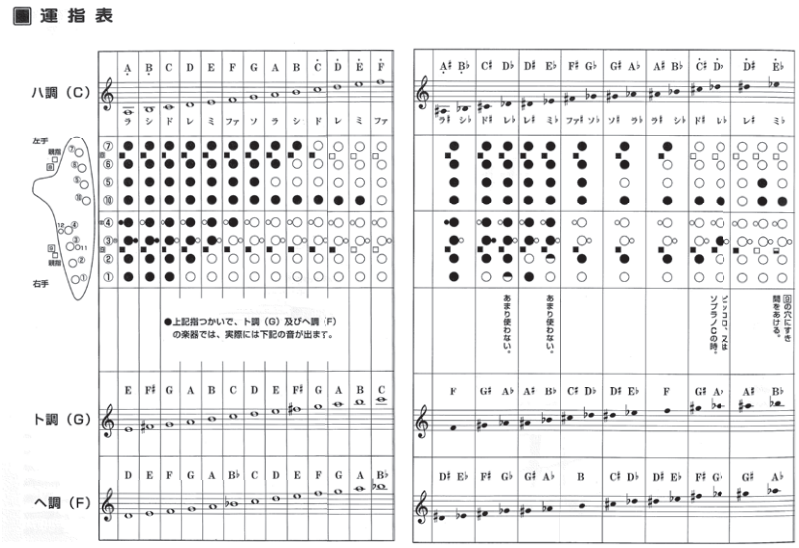


図１　オカリナ運指表[10)]

＜音楽表現活動“実践”＞

試奏後は全員で様々な形態で音楽表現活動・身体表現を行った。演奏曲はやなせたかし氏と久石譲氏作曲の児童アニメの曲を使用した。その他に、「山の音楽家」「あたま かた ひざ ポン」「どんぐりころころ」を実践に使用した。JASRAC作品データベース[11] で「山の音楽家」の原曲ドイツ民謡「Ich Bin Ein Musikante」と「あたま かた ひざ ポン」の原曲イギリス民謡「London Bridge Is Falling Down」、「どんぐりころころ」はパブリック・ドメインであることを確認し、オカリナで演奏しやすいように杉山が編曲して楽譜を作成した。歌唱には「山の音楽家」は水田詩仙の日本語の歌詞を、「あたま かた ひざ ポン」は高田三九三の日本語の歌詞を使用した。

・アンサンブル遊びの実践内容

①アニメソングに合わせてオカリナで表現する
1、ピアノ伴奏に合わせて、自分なりにオカリナで自由なリズムで表現する。 2、伴奏が止まったら、歌を歌いながら手や腕を上げるなどの身体表現をする。 3、伴奏のテンポの変化に合わせて自分なりに自由に表現する。
②「Ich Bin Ein Musikante」（山の音楽家）に合わせてオカリナの音階でリズムを自由に表現する
1、簡単な音階「ド・レ・ミ・ファ・ソ」を吹く。 2、「1（いち）、2（に）」の掛け声に合わせて、「ソ」の音だけを使ってリズムを表現する。 3、ピアノ伴奏に合わせて、2、で練習したリズムで表現する。 4、「山の音楽家」をオカリナと音具で演奏する。歌詞からイメージを膨らませて身体表現する。
③「London Bridge Is Falling Down」（あたま かた ひざ ポン）に合わせて手遊びと太鼓で表現する
1、歌詞中の“ポン”のところで、太鼓を手で叩いてみる。 2、ピアノの伴奏の速度を速くしたり遅くしたり、演奏を止めたりして、歌詞の“ポン”のタイミングで太鼓の音の響きを意識して強く叩いてみる。 3、音楽が止まるまで太鼓をバチで叩き、自分の思うリズムで表現する。再び音楽が鳴り出したら、今度は今まで叩いていた太鼓の違う部分を叩いて音の違いを楽しむ。 4、音楽が止まったところで自分の近くにいる友人とバチを交換して、自分が使っていたバチで太鼓を叩く音と、友人のバチで叩く太鼓の音との違いを感じてみる。 5、太鼓を床に置き、立ち止まった状態で歌詞を歌いながら手遊びをして、歌詞の“ポン”のタイミングで床に置いてある太鼓を自分の思うように表現してみる。
④「どんぐりころころ」に合わせて、ストロー笛で音の表現を楽しむ
1、音楽に合わせて、自由に「ストロー笛」で表現する。 2、音楽に合わせて、音が長く続くように吹いたり、息を短く小刻みに吹いたり、強く吹くなどして色々な音の出し方を探ってみる。

⑤大合奏・アニメ映画曲に合わせて自由に表現する

1、大きな円になり、音楽に合わせて、ピクニックに出かける場面を想像し、自由に足踏み、歩く、駆け足、スキップをして動く。

2、音楽に合わせて、歩きながら下記のリズム譜１から３の順に、手拍子を打ってみる。その次に、これらのリズムを自由に使いながら、４つの音具のうち一つを選んでリズムを表現する。

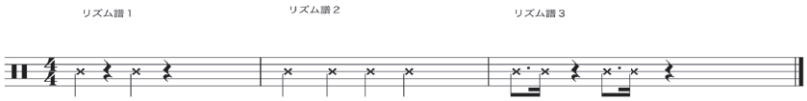


図２　手拍子・太鼓で演奏するためのリズム譜例

3、ピアノの緩急の速度を感じ取り、1、で行った動作をしながら、太鼓とバチまたはストロー笛のどちらかを選び、歌に合わせてリズムを表現する。

4、ピアノの音量を感じ取り、強い音では膝を大きく振り上げて床を踏み鳴らすように、弱い音の時はつま先で静かに歩くなどの変化をつける。音具を使う場合は自分なりに強弱をつける。

5、オカリナ、土笛、太鼓とバチ、ストロー笛の中から気に入った２つを使い音楽に合わせて自由に表現する。

＜音楽表現活動“実践の様子”＞

初めに、漫画家・絵本作家であるやなせたかし氏作曲のアニメソングのピアノ伴奏に合わせてオカリナで自由に表現してもらった。（写真７，８）

多くの学生はリズムに合わせて、オカリナの単音で四分音符のリズム𝄽♩ ♩ ♩ ♩𝄾、八分音符のリズム𝄽♫ ♫ ♫ ♫𝄾でカウントして吹いていた。

その他、高音でtr（トリル）をしたり、メロディー通り吹いてみようと試みたり、楽譜に記載されているコードネームを参考にメロディーに合う伴奏を考えて吹いたりするなどの工夫が見られた。中にはオカリナを手に持って踊る等、様々な表現方法を楽しんでいる学生も見られた。

写真７，８　オカリナを吹きながら自由にリズムを表現している

「Ich Bin Ein Musikante」（山の音楽家）は吹きやすく、短時間で習得できる曲である。学生たち全員に、オカリナの運指とスタッカートのタンギングの奏法を指導した。その後、メロディー奏の練習を15分程度取った。曲の中盤のオノマトペにあたる部分（歌詞：キュキュキュ、ピピピ）は、オカリナを吹くグループと歌いながら歌詞に出てくる楽器のイメージを表現してもらうグループに分かれて合奏を行った。演奏が始まるとイメージを表現するグループには、「バイオリン」「フルート」「太鼓」の弾き真似をする以外にも、歌詞に出てくる小鳥やタヌキなどの動物のイメージで踊ったり・ピピピの歌詞のところでジャンプして、となりの友人と手を取り合って踊ったりするなどの

多様な表現が見られるようになった。

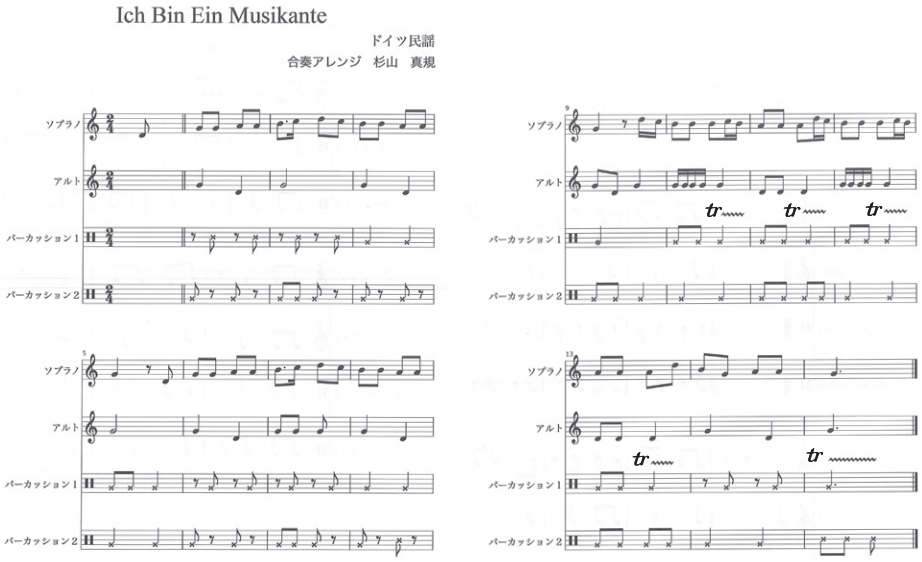


図３　譜例－１

「London Bridge Is Falling Down」（あたま かた ひざ ポン）では、曲に合わせて手遊びと太鼓の演奏を行った。続けて、「どんぐりころころ」に合わせてストロー笛で音の表現を楽しむために、まず、どのような音が出るのか試奏の時間を５分ほどとった。

プラスチックストローを使用したストロー笛は、本体に使用した素材の長さや太さ、吹く息の量や強弱、音の高低によって生まれる空気振動の変化を体感できる。紙管を使用した太鼓は、風船の張り具合によって音の高低や音の響きに変化があり、さらに、自身の力の入れ方や使用するバチの種類によって、音が変えられる表現力豊かで楽しい音具である。自身とは異なる友人の出す音との違いを感じ取って演奏する様子が見られた。（写真９,10,11）

写真９　ストロー笛で音の変化を楽しむ学生たち

写真10　風船を張った紙管太鼓の試奏
（手のひらで叩く、つまむ、バチで叩く等変化をつけている）

写真11　「London Bridge Is Falling Down」のメロディーに合わせて
手遊び・身体表現活動

図４　譜例－２

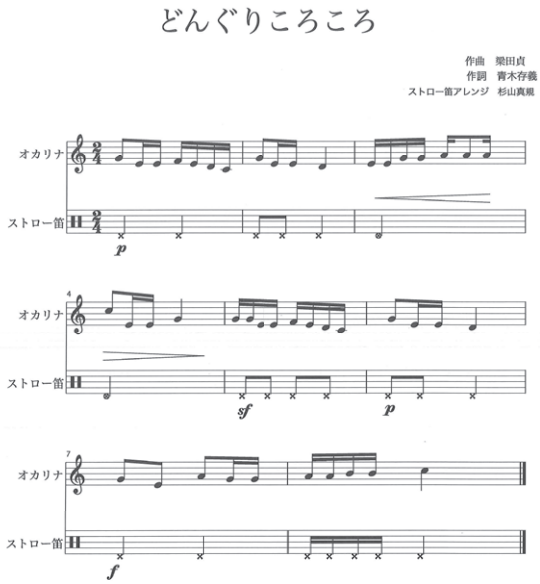


図５　譜例－３

最後に、学生たちが好きな音具を選んで作曲家である久石譲氏の作曲によるアニメ映画曲に合わせて大合奏を行った。

大きな円になり、最初はピクニックに出かけるような場面を想像して、音楽に合わせて自由な表現による足踏み、歩く、駆け足、スキップなどの動きも取り入れた。学生の自由な表現を引き出すために、曲の途中で前触れもなく、テンポをピアノ伴奏で変えてみたり、先の読めないテンポやリズムを用いて表現の幅が広がるように工夫をした。さらに、ピアノの高音部で伴奏を超高速で弾くなどをすることで「小走り」を連想させてみたり、オーバーアクションの演奏を取り入れる等、学生が音の緩急や速さの違いを感じとりやすいように心がけ、伴奏は場面に応じて即興性を持たせるようにした。

学生の様子を見ていると、音具による表現を加えただけで、一気に学生たちの表情も豊かになり、音楽表現や身体表現は、ますます学生の感性が多彩に引き出されるように変化した。更に大きい音や小さい音を身体やバチの叩き方で表現したり、「リス」のように小走りで走りながら太鼓を高速で叩く等の動きを助言すると、体の動きとの相乗効果で音具での表現にも躍動感が見られるようになった。

音楽表現活動が進むにつれて、指示がなくても学生自身が自ら選んだ楽器や音具を演奏したり、思い思いに体を動かしたりして生き生きと自分なりの表現を楽しんでいる様子が見られた。音楽表現と身体表現が混在する合奏という枠組みを超えた表現の場となった。（写真12,13,14,15）

写真12　スキップしながら音具で表現している

写真13　左右に大きく体を揺らしている

写真14　友人と楽しそうに音楽にのっている

写真15　緩急のテンポを感じ取り音具で表現している

４、アンケートからの考察

音楽表現活動の授業終了後、10月15日に奈良保育学院1年生49名にアンケート調査を行い45名から回答を得た。調査は本研究のみに使用することを口頭で説明し無記名で行った。

＜試奏後に学生がイメージするオカリナの音色について＞

実際に、オカリナの音を試奏してから、音色をオノマトペなどの言葉で表現する事を行ったが、アンケートではさらに多彩な言葉で音色を表現していた。（表３）

表３　オカリナの音色をイメージして言葉で表現してみよう（自由記述・複数回答可　総回答数 92 名）

	（人数）		（人数）
優しい音色	10	ひらひら	1
やわらかい	9	海の音	1
きれいな音	9	まるい音	1
小鳥のさえずり	5	ぷおーん	1
温かい音	5	風のナウシカそのもの	1
かわいい	3	大きいオカリナの方がやわらかい音色	1
落ち着く音色	3	透き通った美しい音色	1
こもっている	3	ひびきのある音色	1
ピー	3	不思議なイメージ	1
ピーポーの音（救急車）	2	太った鳥が鳴いている	1
川がせせらぐようなイメージ	2	低音はフクロウの鳴き声	1
かすれている音	2	タンギングをするときれいな音色	1
ねむりを誘う音色	2	ゆったりとした音	1
高音が美しい	2	芯のある音	1
癒される音色	2	包まれるような音	1
自然を感じる	2	ぴゅー	1
ヒュルリラ	2	風のような音	1
ヒュー	2	情緒に満たされる	1
ポポポ	1	となりのトトロのイメージ	1
ふっふっふう	1	牧場の朝	1
明るい	1	ヒュルルー	1

＜手作りしたオカリナを演奏して感じたことについて＞

複数回答可の自由記述で答えてもらった。総回答数は100名になった。その中では、「音を出すのが難しい」が7名で最多の意見となった。次は「演奏を楽しめた」が6名、「合わない音程もあったが、楽しめた」「音程をあわせるのに苦労した」「手作りのため、一人ひとり音程が違うことがわかった」「自分が出したい音が出なかったことが悲しかった」が4名と続き、その他には「次回オカリナを作るときは、音程の正しいものを作りたい」「色々な遊び方があって、すごくたのしかった」「正しい音がでないからこそ、楽しかった」「演奏することで、自分でオカリナを作った達成感を味わえた」という少数意見があり、全体としては手作りの楽器の演奏に戸惑った様子とその不安定さを楽しん

だ様子が混在する回答となった。

既存の楽器を使って楽譜通りに全員で合わせなければならない合奏をすることよりも、学生たちがアンケートで自作のオカリナの音を多彩な表現で答えたことから、自分自身が出す「音」に興味をもって合奏に取り組んだことがわかる。手作りということで思い通りにならなかった難しさもあったようだが、そのことも含め、学生は今回の手作りのオカリナは「楽器」という形にはなっているが、自分が製作した造形物で、自身の吹く息が物質にあたることによって音が発生するという原始的な「音」の発生を再意識する事ができたのではないかと考える。また、「紙管の太鼓」や「ストロー笛」も同様に、音程を気にせず、叩く場所や叩き方の加減、息のスピードや肺活量によって音の変化を実感できたこと、各自のアクションが音の発生に直接つながる事を楽しめたようである。近藤信子、土谷由美子が、手作り楽器の製作を養成校で行った時の学生の最も多かった意見を取り上げて「この活動は“いろいろな遊びへ発展させやすい”ということに最も注目していた」[12]と挙げているように、手作りの楽器や音具であるからこそ自由な表現への展開が期待できるといえる。今回の連携授業でも最終的には、体を動かしたり、踊ったりする事が自然発生的に行われ、演奏だけではない様々な表現方法が混在する音楽表現活動になった。一つのテーマのもとで全員が同じ着地点を目指すのではなく、それぞれが自分なりの表現ができた事で今後の「表現」の授業の可能性が示されたと言えるだろう。

５、今後の課題

今回行ったオカリナ製作は造形に関する高度な技術や設備が必要とされるが、幼児の発達段階に応じた音具の製作であれば保育の現場でも有効に活用できるだろう。造形の授業で製作した物を音楽の授業で使用するというカリキュラムを段階的に行う事を前提とすると、本学院のシラバスでは、令和４年度の保育の内容・方法に関する科目または、領域に関する専門事項である表現（子どもと音楽表現Ⅰ・子どもと音楽表現Ⅱ・子どもと造形表現Ⅰ・子どもと造形表現Ⅱ）、領域及び保育内容の指導法に関する科目である保育内容の指導法（表現Ⅰ音楽・表現Ⅲ造形）に連携授業を組み込むことが可能だといえる。また、今回の連携授業を行ったことで、造形と音楽だけでなく身体表現が多くみられたことから（表現Ⅱリズム）のカリキュラムの計画や編成にも領域を横断して導入することも可能だといえる。

現在は、科目ごとに内容が分けられて授業が行われているが、同じ授業時間内に様々な分野の教員が同時に指導を行い複数の領域が関係するカリキュラムも考えていけるだろう。

養成校の教員を含め学生は、学校行事などを除きほぼ全員が小学校から「図画工作」や「美術」と「音楽」など、分化されたカリキュラムでの教育を受けてきている。高橋慧が、「複数領域を結び付けた表現活動を実践する上で何よりも問題になるのは、大人の側に、表現の未分化性に関する専門知識や、豊富なモデルがない点である」[13]と指摘しているように、まだまだ量的にも質的にも連携授業の研究は少ないといえる。領域を横断して連携する場合、領域の専門的知識を活かしながら多面的で総合的なカリキュラム編成を行なっていくことが必要であるが、授業の目的が一つに絞れず散漫な内容になったり、評価の基準をどこに設定するのかについても今後考えていく必要があるだろう。

６、終わりに

保育者の育成に関して養成校の教員である杉山が、「学生たち自身の表現力や感性を保育内容に取り入れ、活かし、色々なあそびからバリエーションの幅を広げていけるように学生を育成することが重要と考える」[14] と述べているように、指導者は学生の可能性や潜在能力を引き出せるような授業を行うことが重要である。

養幼稚園教育要領や保育所保育指針において「子どもの表現は、言語表現や身体表現や造形表現等が混在する未分化な方法でなされることが多い」と示している。未分化であるということと、一度分化したものを再統合させる事には大きな違いがあるが、連携授業のもとで学ぶことで、学生が保育者として子どもたちの「自分なりの表現」をより理解し支援していくことができると考える。

今後も養成校では専門的な知識や技能を背景とした指導の上で授業が行われるべきであり、教員がそれぞれの知識や技能を出し合って、自身の専門領域だけでなく他領域の指導法の理解も必要とされるだろう。また、カリキュラムの内容が連携することや領域を横断することにとらわれすぎず、子どもたちに寄り添った内容となっているのか評価と改善を繰り返していくことが必要だと考える。

注

（１）文部科学省ホームページ　新幼稚園教育要領のポイント1資料3（2017-08-28）
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shisetu/044/001/shiryo/__icsFiles/afieldfile/2017/08/28/1394385_003.pdf（参照2022-08-11）

（２）文部科学省『幼稚園教育要領』フレーベル館、2017、p8

（３）内閣府『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』フレーベル館、2017、p8

（４）厚生労働省『保育所保育指針』フレーベル館、2017、p8

（５）山野てるひ・岡林典子・ガハプカ奈美『音楽と造形の総合的な表現教育の展開-保育内容指導法（表現）の授業における「音環境を描く」試みから-』京都女子大学発達教育学部紀要、2010、p47 ～ p59

（６）富山短期大学Website（2022-01-11）幼児教育学科授業紹介　音楽表現×造形表現-音を楽しむ音具-、（参照2022-08-11）

（７）中山里美『総合的･横断的に領域「表現」を学ぶ授業の取り組み』富山短期大学紀要第54巻、2018、p93

（８）下清水広・岩城正幸『音楽及び造形教員による指導の実践-オカリナの制作から演奏を通じて-』奈良保育学院研究紀要第14号、2010

（９）著者　クルト・ザックス　訳　柿木吾郎「楽器の歴史［上］」全音楽譜出版社、1965

（10）編者　小出道也　オカリナ初歩の初歩入門　ドレミ楽譜出版社、2021、p6 ～ p7

（11）J-WID　JASRAC Works Information Database作品データベース検索サービス（2020-08-22）
https://www2.jasrac.or.jp/eJwid/（参照2022-08-23）

（12）近藤 信子、土谷由美子『造形表現に関する学生の意識 -保育所実習・手作り楽器への取り組を通して-』中国学園紀要、2010、p124

(13) 高橋慧『造形と音楽を結び付けた子どもの表現活動に関する保育者の実践案と量的分析に基づく現状把握』美術教育学（美術教育学会誌）第38号、2017、p295
(14) 杉山真規『これからの領域「表現」音楽教育分野での検討 -保育者が子どもたちの表現活動の中から感性・資質・能力を引き出せる音楽的表現指導法習得を目的として-』奈良保育学院紀要第19号増刊、2021、p77

参考文献

（1）編著　石川玲子『実践しながら学ぶ子どもの音楽表現』保育出版社、2020
（2）リトミック研究センター本部研究室　こどものためのリトミック～年間カリキュラムとその実践～ step3、リトミック研究センター、2022